奴隷貿易

山下久美子

イスラムの聖典コーランは、奴隷の所有を認めていて、ムスリムは、それを権利として行使してきました。奴隷は、イスラム法によって、女奴隷の子どもか異教徒(ユダヤ教徒やキリスト教徒を除く）の戦争捕虜と決められていました。その結果、奴隷は、異教徒の住む世界から供給されることになりました。それが、中央アジアであり、アフリカ大陸でした。奴隷は、アラブ人の奴隷商を介してバグダッドやカイロに連行され、イスラム世界に莫大な富をもたらせました。紅海とインド洋ルートを経て運ばれた人数は、総計三百三十万人。最盛期は、１９世紀のウスタアラブ時代。その最大の奴隷市場はザンジバル島にありました。

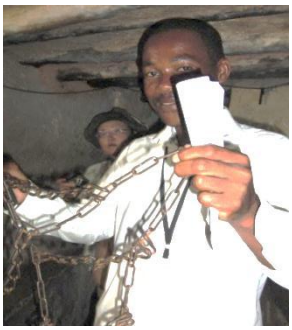
アラブの奴隷商人は、東アフリカ全域より捕えられたアフリカ人をザンジバルへ運びこの場所に奴隷市場を造りました。アラブ人の栄華は、この奴隷商人の上に成り立っています。

ザンジバルの中での奴隷数は１４万人で、人口の６７パーセントに相当したそうです。この奴隷は、クローブ農園で働かされました。クローブの開花寸前の蕾をひとつひとつ手で摘み取るのです。花が咲いてしまうと商品価値がさがるのでタイミングも重要となります。(和名で丁子といい薬用・スパイス・化粧品など利用価値は大きい)それを天日で乾燥させるそして製品を麻袋に入れて頭に載せ、港まで運び出荷するという重労働です。

王宮の奴隷には、王女や王子に乗馬を教える奴隷や水汲みや屠殺を仕事とする奴隷・警備に従事したり・農業労働に従事する奴隷(王は、とても大きなグローブ園を持っていました)

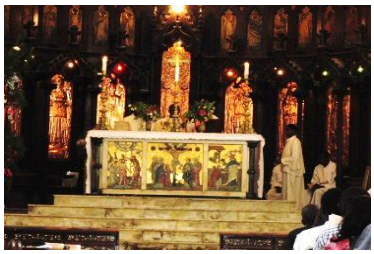
売り場は４６ｍ×２７ｍの長方形で三方はヤシの葉、一方は石で囲まれていました。市は１６：００に開かれ、男の奴隷は土の上に女の奴隷は、離れたところに立たされました。

奴隷市場



上の写真は、連れられてきた奴隷が市に出されるまでに入れられたところで、コンクリートで仕切られとても狭くぎゅうぎゅう詰めにされたそうです。当時は天井はなく、汚物も波の引き潮に持って行ってもらうということでした。男女に分けられ１００以上の牢屋があった。繋がれていた鎖が残っていた。そして、市が開かれる１６：００

になると、隣にある売り場へと引っ張りだされました。この市場は今は大聖堂となっています。



　大聖堂の中は、クリスマスのミサが開かれていました。奴隷市場跡に悲しい歴史を塗り変えようとして１８７３～８０年にかけて、この教会がつくられました。キリスト教会堂スタイルとゴシック建築、アラブ風がミックスした様式で、建てられています。その教会横には、スウェーデン人の彫刻家が１９９８年に造った奴隷の像が歴史の証人のように立っていました。

奴隷の洞窟（マンガプアニ）

この洞窟は、ストーンタウンから少し離れていて、気が付きにくいところにありました。人に気づかれにくい所につくる必要があったのです。

１８７３年に奴隷の売買は禁止になり、市場は閉鎖されました。しかし、すぐになくなったのではなく隠れてアラブ商人は奴隷の売買をしていました。ここはそのとき奴隷が集められたところで、抜け道は、奥へとずうっと続いています。左の洞窟は３０年たってから見つかったものです。沖縄のガマを思い出しました。

香辛料産地

ザンジバルは香辛料もたくさん採れます。大きな香辛料市場へも連れていってもらった。

　一つ一つ葉っぱのにおいをかいだり、名前や効用も聞かせてもらったのですが、すぐに忘れてしまいました。

　歩いていると、子どもたちが寄ってきました。子どもは、どこの国の子でもかわいいです。

漁師の船。（漁業は大切な収入源・船の修理は丁寧にします。水がはいってこないよ

うにしよう「すきまにわたを埋めこんだり、仕上げの油を煮ていた

ストーンタウンの街の中は、真夏のようだ。歩いていると汗がだらだら出てきます。通りには、さとうきびを押しつぶしてさとうきびジュースを売っている人がいました。思わずみんなで一杯買って回し飲みしました。甘くておいしかったですよ。

公園の前の海では飛び込み競技していたり、ダウ船が走ったり、夕日がとてもきれいでした。

雑談

ホテルは当初子どもさんが参加するということだったので、安全第一で高級ホテルばかりだった。プールつき。海が目の前に開けて見えて素敵なところでした。

　ところが、時間がゆっくり流れすぎて、夕食はコースでしたが、１時間に一品しかでてこない。８時頃席について食べ終わったのは、１２時前。私は、眠りながら、食事をしていました。

島岡宅を訪ねて　Ｋさんが何度も連絡を取って下さって実現しました。私は、名前すら知らなかった。島岡強・由美子夫妻はザンジバルに１９８７年から住んでいて、もう２５年になるそうだ。夫の強さんは革命児と呼ぶらしい。家の表札にも書いてありびっくりした。由美子さんが二人の出会いと何故アフリカに住んでいるのか。「我が志アフリカにあり」の本に書かれています。Ｋさんが紹介しているのを私は知らなかったのですが、読んでいけばよかったと思いました。

　しかし、ご夫妻は、大変心優しく迎えてくださり、奥さんの手料理はとてもおいしかったです。さしみ、ナス料理、てんぷら、サラダおまけにタンザニア米のおにぎりもごちそうになりました。お二人は、アフリカの独立のために、仕事の場を与えたり、アフリカの製品の輸出や柔道を通して文化振興にも関わり幅広く活動しているかたです。